福崎町文化

第39号　令和5年3月2日　兵庫県神崎郡福崎町福田176番地の1 福崎町文化センター発行

物語絵　松岡映丘画
福崎町立柳田國男・松岡家記念館 蔵

應聖寺関連資料からみる高岡の歴史

福崎町文化財審議委員
叡山学院学監・教授
應聖寺住職
桑谷　祐顕

はじめに

筆者は、高岡郷の中心地にある應聖寺（沙羅の寺）の住職を勤めることから、拙寺に伝わる諸資料を見聞、整理する立場と機会に恵まれた。それら未公開資料をも用い、福崎町西部の「高岡の歴史」の一端を紹介することを目的に、本稿執筆を快諾した次第である。紙面の都合上、注記を省略することや考察結果だけを報告することをお断り致します。

一、『播磨国風土記』の「高岡の里」

現在の高岡地区は、福崎町北西部に位置する田口、板坂、桜、長野の四地区をいい、「高岡番地」は、板坂、桜、長野、神谷と福田の北西部（旧長野所得）をいう。現在は、人口減少の過疎地区であるが、凡そ一三〇〇年前の奈良時代（七一〇～七九四）前半の頃は、播磨国「神前の郡」（現、神崎郡の前身）の市川西岸の中央部に「高岡の里」があった。

『播磨国風土記』は和銅六年（七一三）五月二日の風土記撰進の官命により、霊亀元年（七一五）頃に編述されたという。

当時の播磨国「神前の郡」は、北は今の生野から、南は今の砥堀あたりまでをいい、市川東岸に北から川辺の里、多駝の里、蔭山の里があり、市川の西岸に北から塁（埴）岡の里、高岡の里、的部の里の六里があった。つまり、市川西岸の現福崎町全部を含めて「高岡の里」と呼んでいたのである。

『風土記』原文は省略するが、「高岡の里」の地名は、この里に高い岡があるから名付けたといい、しかも、その説明には、神前山（現、山崎地区の北）と奈具佐山（現、七種山）の記述を以てそれに充て、前者については郡名（神前の郡）の説明と同じとし、後者については「檜が生える」「その名の由来は不明」とのみある。

当時は二十五人程の家族集団を一戸といい、一里は凡そ四十戸というから、一里には約千人が居たことになる。つまり、「高岡の里」も、千人程度が埴岡里と岩部里の間の市川西岸に定住していたことが分かる。

二、『風土記』を証明する遺構

近年の高岡桜地区ほ場整備に伴う「桜東畑遺跡」（長野橋北詰交差点の北西）調査では、奈良時代の大きな掘立柱建物が発見された。官衙（役所）的な建物跡と考えられ、当時の高岡地区の中心的遺構と見られている。

つまり、『風土記』の記述を補完する遺構がここに発見され、奈良時代（七一〇～）初期、この「高岡の里」に、確かに奈良朝廷の新制度が及び、その制度下に我々の遠い先祖達が居住し生活していたことが知られるのである。

しかしその一方、その律令制国家制度がスタートする凡そ百年前、つまり七世紀前半頃、この高岡の地にはこの地域を治めたであろう権力者が確かに存在して居た。その埋葬場所が、現在の神谷地区の医王寺境内にある「神谷古墳」である。福崎町唯一の方墳で、『風土記』に先行する凡そ百年前の「高岡の里」の前史を物語る史跡が現存している。

つまり、この辺りの地域は、古代の中心的地域と見られるのである。そのことから、桜・長野・神谷地区、特に福崎西中学校北西部方面辺りには、当時の郡役所の巨大遺構が眠っている可能性が潜んでいそうだ。

ところで、現「七種山」の名前の由来とされる「滋岡川人の七種伝説」を高岡の古代史に推す人が居るかも知れない。その伝承は、田口地区の金剛城寺の寺伝『金剛城寺略縁起』（天文三年（一五三四）住僧印議が旧記を抄出したもの。『兵庫県史』史料編中世四）に、その建立の頃、飢饉ありたる時に化人滋岡川人なる者、七種の穀種を村人に与えしことから七種山と称する（趣意）とある。

もし寺伝によるならば、舒明朝（六二九～六四一）という当寺建立期、既に滋岡川人が存在したことになり、当時「七種」の名が広く周知されていたことになる。官命による七一五年撰という『風土記』は、そもそもその風土・土地の由来を記録収集することを目的としたが、「高岡の里」の記述には「奈具佐山（七種山ではない）。：その由を知らず」とあり、そこにこの伝承は存在していない。

恐らくは、『風土記』の記述が当時を物語る事実で、滋岡川人が七穀種を与えた話は、『風土記』以降に付加されたと見るべきであろう。しかも、滋岡川人は、九世紀中後期の人物とする考究もあり、後考を要する。（前同・『県史』）

こうした理由で、平安中期以降の伝承を物語る伝承としては傾聴の価値を見出し得るが、以て奈良時代以前の「高岡の里」の史実の補完にはならないと判断される。

三、應聖寺「誕生仏」は県内最古の仏像

平成十九年福崎町の仏像調査で、應聖寺蔵「銅造誕生釈迦仏立像」が、兵庫県下で最も古い白鳳時代（七世紀後半）の仏像の一つと判明し、平成三十年福崎町指定文化財となった。（写真①）

①銅造誕生釈迦仏立像

その像は、釈迦が生まれた時に七歩歩み、右手を上げて天を指し、左手を下げて地を指し、「天上天下唯我独尊」と唱えたという姿を鋳造したものである。四月八日の「花祭り」（誕生会、降誕会ともいう）に使用される小像で、花で飾った「花御堂」の桶の甘茶を、小さな杓で誕生仏にかけて釈尊の誕生を祝う、所謂「誕生仏」と言われる銅像である。

現在、兵庫県下では日本最古の飛鳥時代の仏像（六世紀末～七世紀中頃）は確認されていないから、本像はそれに次ぐ白鳳時代（六七三～六八六）の「白鳳仏」と確認され、兵庫県下で最も古い仏像の一つと判明し、無論、福崎町内では調査済み現存最古の仏像と判定された。

つまり、「神谷古墳」の約五十年後、『風土記』に先行すること約五十年前の時代に在って、東大寺や法隆寺の「天平仏」より古い「飛鳥仏」に次ぐ「白鳳仏」が、飛鳥奈良の都から遥か遠く離れたこの「高岡の里」に、当時の一級文化・最先端の仏教文化が、見事に伝播していたことが証明される結果となったのである。

四、旧『福崎町史』所収の『應聖寺縁起』

以下、高岡郷の歴史、神西郡の歴史の一端を物語る應聖寺関連資料を基に紹介して行きたい。應聖寺の山号は、現在は「妙見山」を用いる。但し、神仏のご加護篤く、妙なる霊験あらたか（顕）と四辺に知られたことから、かつては「妙顕山」と云った。

かつて『應聖寺縁起』なるものが伝来したようである。但し、残念ながら現伝していない。よって、それを基に編纂された旧『福崎町史』（大正十四年、福崎町役場刊）に記載された拙寺の記事を抄出してみたい。

妙見山應聖寺　天台宗　福崎町高岡

本尊聖観世音菩薩

抑も当山は第八十九代亀山天皇の御世、文永二年（一二六五）冬十一月、赤松則祐公（一三一一～一三七一）の建立になり、祐運大徳を開基とする。本尊聖観世音菩薩は、法道仙人の一刀三礼の御作、霊験実に顕著にして平景清公が常に念じ給いし霊像であった。赤松氏、当地播磨国を領有したる後、この霊像の存在を聞き及び、都に上り遙々迎え奉り、当寺の本尊として安置し、十方精霊菩提を回向し、併せて（赤松家）家運長久を祈る道場と定め給うた。誠に台門の古刹として往時は堂塔伽藍軒を列ね寺観の美は法門の儀標として衆庶の瞻仰する所なり云々。

右のように『應聖寺縁起』にはあるが、今となっては少しく訂正を加えなければならない。

先に紹介したように、当寺には白鳳時代の誕生仏が伝来するから、古来、別伝として語り継がれて来た「当寺は白雉年間（六五〇～六五四）に法道仙人により開基された」とする《法道仙人開基説》を採り、その直後に白鳳仏が祀られたと云わねばならない。

また、亀山天皇の御世文永二年（一二六五）冬十一月、祐運大徳による鎌倉中期の中興。但し、拙寺復興の発願者は、初代播磨国守護梶原景時、次いで守護小山朝政、拙寺中興時は嫡孫小山長村、赤松則祐公による伽藍復興は南北朝期である。

五、鎌倉時代

平安末期、播磨に限らず西国一帯は、平家一門とその与党の堅固な地盤であったが、平家没落後は、この「高岡の庄」も関東御家人の所領となった。平安末～鎌倉初頭、播磨国守護職に補任されたのは、鎌倉の有力御家人の一人、梶原景時（？～一二〇〇）である。

『吾妻鏡』によると、「梶原景時の変」の後の正治元年（一一九九）、当地はやはり関東の有力御家人、小

山朝政に受け継がれたとある。当時の「高岡の庄」は、確かに小山文書『小山朝政所領注文案』や『小山朝政譲状案』等にその記述があり、『福崎町史』第三巻に詳しい。例えば後者には

一、播磨国　守護奉行職　高岡庄
高岡北条郷

とあり、寛喜二年（一二三〇）二月二十日、播磨国守護小山朝政が高岡庄を嫡孫の長村に譲るとした状案である。その領地「高岡庄」は、守護の直轄地として、その領国播磨の中でも直接支配の及ぶ特別な領地であったことに注意を要する。

まさに、『應聖寺縁起』にいう應聖寺中興は、小山氏にとって自らの知行国（播磨国）領有安堵の象徴であり、直轄地（高岡庄）の無事安寧の為の祈願所の復興であった。但し、別伝では、自身の領国・領地の安穏を祈願するため、應聖寺を発願した最初の人物は、初代播磨国守護梶原景時とする。

また、その後に起こる文永十一年（一二七四）と弘安四年（一二八一）の元寇は、西国領有の御家人にとっては領国安堵の一大事であった。太宰府に派遣したのであろうか、「蒙古撃退と国土平安・領地安穏」を祈らせた「護国法要」に使用した四鈷鈴（密教法具）が伝来する。（写真②）恐らくは、祐運大徳の法脈に帰依して播磨国の鎮国道場、護国祈願所としての機能を担わせたのであろう。

②蒙古撃退の四鈷鈴

六、南北朝・室町時代

更にその百年後の南北朝動乱期、正平六年（一三五一）十二月、播磨守護赤松則祐公（赤松則村（円心）の三男）によって平景清公の念持仏が都より奉迎され、應聖寺は播磨の在地領主により再び復興された。

前出の『縁起』では、当時の應聖寺は「堂塔伽藍軒を列ね」、台門（天台宗）の古刹として「寺観の美は法門の儀標として衆庶の瞻仰する所なり」と称えられ、七堂伽藍を備えた秀麗なる大伽藍であったと伝えている。（現在の寺域には、確かに数か所の広い屋敷跡が確認される。）

さて、その赤松則祐公は諱を「則祐」といい、早くから比叡山延暦寺に入って「律師妙善」と称した。元弘元年（一三三一）、後醍醐天皇が鎌倉幕府討伐を挙げて挙兵した「元弘の乱」に、則祐公は、後醍醐天皇の皇子で天台座主であった護良親王に付き従い転戦した。

別伝では、則祐公が比叡山に入山した機縁を結んだのが、当時の應聖寺住職であったという。故に本寺中興の祐運大徳に列なる法脈の「祐」の一字を頂き「則祐」と名乗ったという。しからば、則祐公の生誕時、既に父赤松円心と應聖寺住職は親交があったということになろう。

実はそれを確からしくする証拠が存在する。則祐公の命日は応安四年（一三七一）十一月二十九日であるが、『應聖寺日牌』（有縁者の命日を書き記した回向帳）の二十九日の條には、應聖寺建立発願者赤松則祐公として、誕生年とその時刻が記されている。

普通、菩提を弔う菩提所は命日を記すが、誕生年とその時刻を留めるのは、拙寺が父赤松円心と既に親交があり、その子則祐の誕生と武運長久を祈る祈願所であったことを如実に物語るものであろう。

それ故に、播磨守護と成った暁に、自身と赤松氏一族の祈願所として、應聖寺の伽藍造立と平景清公の念持仏奉迎を果たしたと別伝に伝えるのである。

七、江戸時代 ―一宮神社と大般若転読会―

江戸時代の高岡の歴史の中で特筆すべきは、往昔からの神仏習合思想に基づき、一宮神社において『大般若経』六百巻の転読法要を年中行事とすることである。法会創始以来、約二九〇年の伝統を今に受け継いでいる。その間、神仏分離令という明治政府の厳命をものともせず、ひたすら当村の住民は神社神前での仏教経典転読を脈々と継承して今日に至っている。（写真③）

③一宮神社「大般若転読法要」

以下、『神崎郡誌』新旧『福崎町史』収録の当村庄屋の家系にある平岡家文書や一宮神社収蔵資料によって要約しつつ論じよう。

そもそも一宮神社は、創立年月不詳なるも、初め七種に鎮座せしものを宮ヶ谷に遷座し、高岡庄一宮大明神、高岡神社とも称し、寛文七年（一六六七）本殿を建立したという。

後に、当村庄屋、山内平太夫道継は、大般若経六百巻を願主となって寄付し、毎年転読会を奉修したところ、その神徳絶大なる故に、前宝鏡寺本覚院の宮様（後西天皇皇女）に、一宮神社に正一位の位を願い出たところ、宮様は大いに喜ばれ、元文元年（一七三六）正一位の扁額を下賜され、御家来分として平岡姓を賜ったとある。

一宮神社には、その時下賜された極彩色に金の「菊と五七桐」両紋の扁額が現伝する。（写真④）注目すべきは、その一宮神社は、神西郡高岡庄一宮とあり、七邑（村）末社十社の筆頭とすることである。七村とは、板坂、田口、桜、長野、神谷、山崎、福田村（『郡誌』）である。

④下賜された「正一位一宮大明神」扁額

しかも、その「一宮神社別当」（神社末社十社を差配する責任者）は應聖寺住職で、その配下の神主は高松采女、本願主は板坂邑庄屋平岡平太夫とある。例えば、文化九年（一八一二）の長野村諏訪神社の遷宮は神主ではなく、一宮神社別当應聖寺住職が長野村栄福寺住職を伴い行うなど、当時の実質権威も大きかった。

（諏訪神社棟札。因みに、当初以来、神主は一宮神社に居り、後に板坂村困窮により、二宮神社に移った）

旧『福崎町史』には、庄内第一の大社である一宮大明神の毎年の例祭には、（先の神位序列の如く）、高岡板坂一宮神社を先頭に、山崎村二宮、福田三宮、次に田口村、高岡村（桜村、長野村、神谷村）の各神相集まり、福田村御旅所にて渡御式ありて後、福田村阿弥陀堂（旧福田公民館横）に集まり休憩の後、先の順序にて還御あり（趣意）という口碑を伝え、宮様の権威の裏付けができた「一宮大明神」以下、神位の格付け・序列化が図られた様子が、当時を語る資料から窺える。

また、毎年九月一日の一宮神社例祭は、高岡庄内七村の祭礼でもあり、一宮神社に各村屋台が集合し、近郷（板坂峠を越えた現夢前町）の人々も集う盛大な祭りであったようだ。

その祭礼に行われた神事（仏事）こそが、今に続く「一宮神社大般若経転読法要」だったのである。それには、近郷（夢前町四ヶ寺）を含む、神西郡天台宗十ヶ寺の寺院が法要出仕しており、その出欠を示す回章が應聖寺に残っている。

八、江戸時代　―應聖寺文書他―

應聖寺には、三基の特別な御位牌が伝わっている。第一は三代将軍徳川家光公の御位牌。第二は二代秀忠公（台徳院）、三代家光公（大猷院）、四代家綱公（厳有院）の三代尊霊が並祀された御位牌。（上記二基は葵の御紋）第三は姫路城主歴代尊霊位牌である。（写真⑤）特に、徳川本家の御位牌を祀ることは、当時、有力大名でも許されない。しかも、特異な三代並祀の御位牌は、全国に類例がないという。

⑤徳川家光・徳川三代・姫路城主歴代尊霊位牌

筆者は、千姫の関係者を祀った御位牌と考えている。つまり、秀忠は千姫の父、家光は弟、家綱は甥である。では、徳川本家三霊を祀ることが出来たのは一体誰だろうか？併せて、姫路城歴代城主を祀っていることから、その本願主はそれ以降の姫路城主の可能性が高い。

時代は下るが、應聖寺文書の中に「姫路御城主酒井雅樂頭殿二度御来詣記」（写真⑥）や、その時の供応膳の御品書き図（断片）が伝わっており、確かに姫路城主が度々参詣された事実が知られるからである。

⑥酒井公御来詣記

特に、酒井家二代目藩主酒井宗雅公にまつわる松江藩主松平不昧公、実弟酒井抱一、酒井家三代の家老河合寸翁の銘のある茶道具類は、城主からの拝領の品と思われ、姫路城主との特別な関係を窺わせる。

話を元に戻そう。應聖寺本堂と書院の裏手の山裾には、江戸時代初期の作庭とされ、渓谷風の滝、沢飛石、三尊石等を特徴とする池泉観賞式庭園が広がっている。この庭園の作庭

時期は、ちょうど先の徳川三代の逝去直後に当たり、この三代菩提回向の為の作庭寄進の可能性がある。同庭園は、平成四年「名勝應聖寺庭園」として兵庫県指定文化財と成った。（写真⑦）

⑦県指定文化財「名勝應聖寺庭園」

西播磨の文化財庭園は二件しかないが、常時公開されている唯一の名庭として「青モミジ」「沙羅」「紅葉」と四季を通じて県内外の観光者に人気である。姫路城主も眺めたであろう同寺の紅葉は、古来楓樹に富むと名高く、明治初期の漢詩人であり、神崎郡長であった倉本櫟山の『櫟山詩存』には「高岡紅葉」と挙げられ、神崎十勝として文人墨客に夙に名声高しとある。（旧『福崎町史』）

また、十八世紀初頭の「應聖寺庭園」作庭の時期は、同寺が最も隆盛を誇った時期で、本堂の天井から畳までの大きさの「涅槃図」（写真⑧）が軸装され常備された年（元禄十四年・一七〇一）に当たる。

特に本図は、制作者こそ不明なるも、描かれた菩薩や仏弟子が富に多く、表情豊かな上に、髭・まつ毛の一本一本まで精緻に描き上げられた涅槃図の秀作である。また、「仏伝」に有名な白象を始め、多くの動物たちや十二支の他、珍しいと云われる猫も描かれている。周知のことであるが、その背景に描かれた八本の樹木が「沙羅」である。（毎年二月十五日の涅槃会にて公開）

その有縁の寄進者を見ると、前之庄や神種など、後に一宮神社大般若転読会の隆盛が及んだ地域とも重複しているようで、應聖寺の年中行事や一宮神社の祭礼を通じ、かなり広域な信徒を有していたようである。

⑧涅槃図182×302cm

加えて、後に三〇〇年の樹齢を誇り「日本一の大木」と称された應聖寺の「沙羅」（平成八年枯死）が植樹されたのもこの時期である。

実は平成十四年、應聖寺書院の十六枚の襖の下張りから、江戸時代から明治・大正時代にわたる大量の古文書が発見された。本山の比叡山や近郷の天台寺院との伝達書簡、檀信徒回向関係文書、山林田畑土地関係文書、年貢収納文書、年中行事関係文書等や、その他、当寺証明の通行手形や、播磨出身力士を集めて興行した勧進相撲の番付表もあった。

特に珍しいものは、赤穂義士の一人横川勘平の「書状」と「吉良上野介の首受取り請文」を写した手紙が見つかったことであろう。前者は、刃傷事件から討ち入りを果たすまでの浪士の様子を綴ったもので、後者は打ち取られた上野介の首を受け取った吉良家の請書である。（写真⑨）

特異なこの内容を一紙に書き写せる立場の者が、その情報を待ち侘びる者に伝えたかった内容である。恐らくは、当時離縁されて実家に居た大石内蔵助の妻りくの元に届けられるはずのものであったと思う。

当寺が、赤穂からりくの故郷・豊岡に通じる西国巡礼道に面するが故の故事である。因みに、その発見は赤穂浪士討ち入り三百年（平成十四年）のことであった。

以上、應聖寺文書等によって高岡の歴史の一端を概観したが、紙面の関係上、近現代史は省略する。

⑨赤穂事件関係文書

福崎町と石灰について

福崎町教育委員会社会教育課主査　長谷川幸子

はじめに

皆さんは「石灰」といえば何を思い浮かべますか。私は、運動場に白線を引く粉が一番に思い浮かびました。野菜作りをする方なら、土壌を中和するための石灰肥料を思い浮かべられたかもしれません。工事に関わる方ならセメントの原料、お菓子の袋を開けた人なら、湿気防止に入れられているのが石灰乾燥剤だと見つけられたでしょう。

このように、石灰は私たちの身近にある、暮らしに欠かせない素材です。日本は資源に乏しい国ですが、その中でも石灰は国内自給率百パーセントの数少ない資源の一つであるそうです。

そんな石灰の原石は、かつて福崎町でも採掘されていたことをご存知ですか。今では記憶にある方も少ない、町内の石灰について調べてみましたので、ご報告したいと思います。

石灰の歴史

石灰は、石灰石が原料です。これを砕き、九百度以上の高温で熱すると生石灰ができます。生石灰は水と反応し、消石灰になります。消石灰は粉体であるため「石灰」とも称されます。生石灰は乾燥剤、消石灰は畑の肥料や消毒、運動場に引く白線などに用いられます。

石灰の利用は古く、平安時代には防火などのために建物の上塗りをする漆喰に用いられています。漆喰は消石灰に糊や苆などを混ぜて作る壁材ですが、とても貴重なものであったため、漆喰を使えるのは天皇や貴族や裕福な寺院など一部の人に限られていました。

石灰の利用が一般化するのは江戸時代に入ってからで、本草学者の貝原益軒（一六三〇～一七一四）が編纂し、宝永六年（一七〇九）に刊行された『大和本草』には、石灰は建材だけでなく止血剤などの薬とするなど「用多し」とさまざまな記述がみられます。江戸時代の後半になると、水田の肥料、除草剤、防虫剤としても利用されるようになりました。明治以降には、都市建設のセメントなど日本の近代化も支えました。

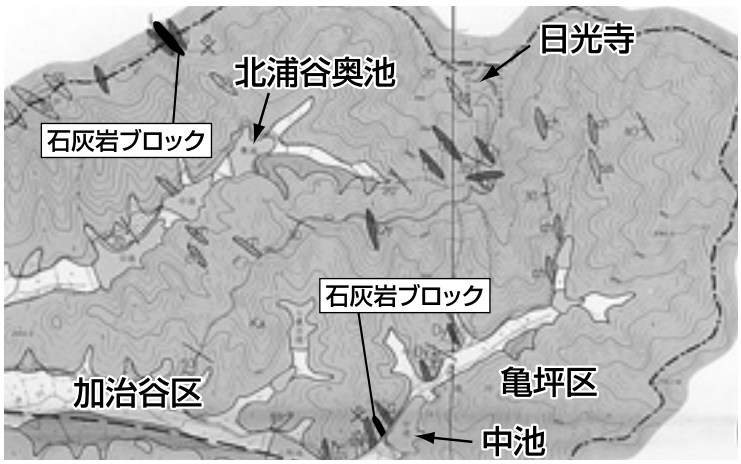
現在も石灰は幅広い用途で利用されており、社会に貢献しています。

福崎町の石灰岩の分布

では、石灰石（石灰岩）は福崎町のどこにあるのでしょうか。

『福崎町史　第三巻』の地形・地質図（付図Ⅰ）には、町内の岩石の分布も図示されています。図の縮尺により大きさが十メートル以下のものは図上では省略されていますが、これによると、石灰岩ブロックが福崎町の東部で二か所見つけられます。

一つは亀坪区の南にある中池の西側の山。もう一つは、日光寺山山頂の峰続きの西側、加治谷区北東の北浦谷奥池から北に登りつめた山の頂付近です。



福崎町東部の石灰岩の分布『福崎町史　第三巻（付図Ⅰ）』

これらは約二億年前の中生代ジュラ紀はじめの地層で、海底に堆積した泥が起源の堆積岩の中に、暖かい海で形成された石灰岩などがはさまっています。

ちなみに、この石灰岩の中には約二億五、六千万年前の海に生存していた紡錘虫（フズリナ）やサンゴなどの化石が入っているものが見つかっています。福崎町でも化石を見つけることができるのです。

石灰石の採掘場所

この二か所の石灰岩の分布する場所について、地元の方のお話と絵図から石灰石の採掘についてみていきたいと思います。

（1）亀坪区中池西側

①地域の方からの聞き取り

中池西側の山は、地元では「灰山」と呼ばれています。（写真①）

江戸時代後期から昭和初期まで採掘が行われていたといわれており、今は土で塞がっていますが、採掘のために掘られた穴の跡が二か所残っています。（写真②）

昔、大貫の人がここで石灰石を採掘されていたそうです。

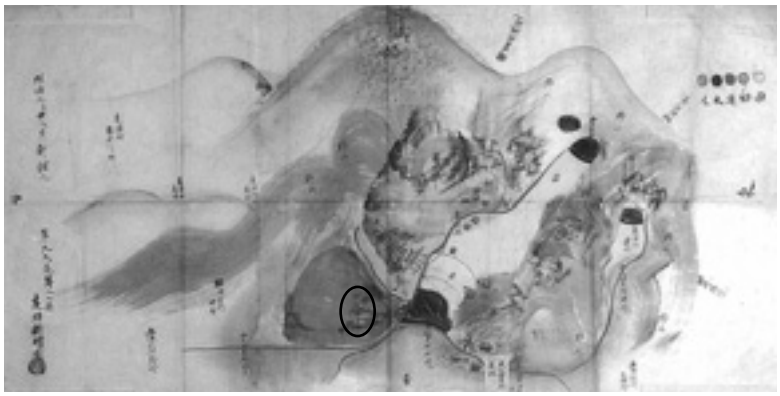
写真①　亀坪区の中池と灰山

写真②　石灰石採掘跡

②明治五年（一八七二）　亀坪新村絵図（加治谷区蔵）

亀坪新村の絵図では、村の南の池（中池）の西側の山に「石灰石出所」と記されており、ここで石灰石が採掘されていたことがわかります。

写真①の採掘跡の残る灰山が、この絵図に示された「石灰石出所」にあたります。



亀坪新村絵図（〇で囲っている部分が「石灰石出所」）

（2）北浦谷奥池北側

①地域の方からの聞き取り

今回の調査では、実際に現地に行くことはできませんでしたが、日光寺山山頂から西へ三十分ほど歩いた場所に、石灰石を採掘した跡とみられるくぼ地があるそうです。

ここで採掘された石灰石は、北浦谷奥池のほとりから運ばれ、加治谷区へ抜ける峠の途中にあった窯で焼かれ生成されていたと伝わります。（写真③）

また、現在の井ノ口区にも、ここで採掘された石灰石を生成する窯があったと聞かれている方もおられるそうです。

写真③　窯跡と伝わる場所。
右の道の奥が北浦谷へ続く。

②明治二十七年（一八九四）　東田原村石灰山関係絵図（加治谷区蔵）

石灰岩運搬のための新道路が書かれた絵図です。ここに年代の書入れはありませんが、明治二十七年の運搬道路絵図の下書きになります。絵図の下部（南）が加治谷です。道路のつきあたりにある一番高い山に「採掘場」と記されています。そこから山道を下り、谷を通って採石を運んでいたことがわかります。

北浦谷の石灰石採掘の歴史

ここでは、前述の北浦谷奥池北側（字田原山北浦谷）の石灰石採掘について、地域に残る資料から歴史を追っていきたいと思います。

この場所は、古くから旧田原村の入会（いりあい）（農民が共同利用する場所）であるため、地域に受け継がれてきた文書にも記載が見つけられます。

（1）石灰石はいつ見つかったか

長い間山中に眠っていた石灰石は、いつ発見されて利用されるようになったのでしょうか。

文化七年（一八一〇）の『村明細帳』（当時の村の状況を記したもの）の、大門村・井ノ口村・田尻村をみてみます。そこでは、田原山は十二か村（長目村・中島村・西光寺村・八反田村・吉田村・西野村・井ノ口村・北野村・辻川村・田尻村・大門村・加治谷村）が薪などの木や田畑の肥料とする草葉を採取する「入会草刈（くさかり）

東田原村石灰山関係絵図
（〇で囲っている部分が「採掘場」）

井ノ口村明細帳
（井ノ口区蔵）

場」として記録されています。このときには、石灰山としての記載はありませんので、まだ発見されていなかったようです。

加治谷区には北浦谷山地が民有地であることを申し立てた『官民有地区別事由上申書』という明治二十年（一八八七）の文書が伝わっています。これによると、「文政年間（一八一八～一八三〇）同（田原山）山中小字カマス谷ニ於テ灰石発顕セシ」（※括弧内は補注）とあります。

また、入会村が所属する辻川組の大庄屋三木家に残る天保九年（一八三八）の『かます谷石灰石掘取差障りにつき伺書（案）』は、辻川組・御立組12か村入会の田原山「かます谷」で石灰石の採掘が計画され、その影響で土砂が用水池に流れ込むことを心配して取り止めを願い出ている文書です。ここでは、七年前の天保三年に「石灰焼」をすることで村に差し障りはないかという尋ねがあったと書かれていますので、明治二十年の上申書に書かれているように、文政年間に石灰石が発見され、その数年後に採掘の計画が持ち上がったのだと考えられます。

(2) 石灰石は誰が採掘していたのか

①入会の村々

前述の明治二十年の上申書によると、石灰石が発見された後は、「入会村ニ於テ採石製灰シ各村ノ需要者へ販売」したとあります。

官民有地区別事由上申書
（加治谷区蔵）

もう一つ資料をみてみましょう。中島区に残る『旧藩調査控帳』は明治初期（明治四～五年頃）に村内の職工や入会山などについて取り調べた資料です。これは、平成三十年度から中島区の皆さんと一緒に、区内に残る古文書の整理・保存を進める中で発見されたものです。

その中では、十二か村入会の草刈山である「喜虎山」で浪岩と呼ばれる灰石（石灰石）が出るので、明治二年（一八六九）までは入会の村々で石灰を焼いて収入としていたとあります。その後、明治三年に「旧藩様」（姫路藩）が石灰業を行うようになり、入会の村々へは石灰石一駄（百三十六キログラム）に付き手当てが与えられたと記載があります。

旧藩調査控帳（中島区蔵）

②旧士族

神戸で発刊された日刊新聞である神戸又新日報の明治十九年七月二十七日の紙面には、神崎郡役所開庁の記事が載っています。そこには、県令代理として式に出席した牧野書記官が、翌日、西田原村字北浦の石灰山を視察したことが書かれています。何故視察したのかについて記事は、姫路の士族二百二十余名の発起で、士族が北浦谷で石灰製造業を行うための授産資金の貸与を願い出てすでに許可されており、いよいよ事業に着手するところだとしています。

この時期政府は、明治維新によって職を失った士族を救済するために、産業資金の貸与を行い、彼らが産業に就くことをすすめる政策を推進していました。この後、記事のとおり北浦谷で姫路の士族が石灰製造を行ったかどうかは分かりませんが、これら士族の事業は多くが失敗に終わっています。

③石灰山稼人

再び、北浦谷の来歴が書かれた明治二十年の上申書に戻ります。石灰石は入会の村々が採掘していましたが、その後、石灰業を北野村五郎兵衛という人物に任せています。その益金で「大宮ノ社殿ヲ修繕」したこともあったと書かれています。大宮とは旧田原村の郷社である熊野神社でしょうか。明治九年には入会村々で協議の上、東田原村の高井某が官許を得て石灰業を行い、益金の若干を入会各村に支払っていたとあります。

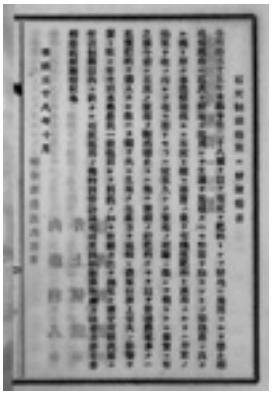
その翌年、明治二十一年の『灰石坑業につき為取交替約定証』（田尻区蔵）でも、「山中に産スル灰石製造坑業稼方」を入会の村々が引き続き東田原村の個人に任せて営業をしていることが分かります。ここでは、石灰坑業の純益金は明治二十二年から一年につき二百六十円ずつ支払うよう北浦谷を共有する村々で取り決められています。

肥料としての石灰利用

江戸時代の後半から、石灰は一般に肥料としての利用が始まりましたが、当時の用途は主に水田の肥料でした。石灰は干鰯や搾滓などの購入肥料よりも安価であったため、農民は積極的に使用していました。

しかし、明治に入り西洋の知識が導入されると、長い年月、石灰肥料だけを多量に使用していると土壌が荒廃するとして、全国的に石灰の使用を危惧する声が高まりました。兵庫県でも明治三十五年（一九〇二）四月十日、県令第二十八号により石灰を肥料として使用することが禁止されています。これを受けて、神崎郡の農民は、明治三十八年に石灰の利用の許可を求める陳情書を県知事あてに提出したようです。

陳情書では、石灰も適量を有機肥料と混ぜて使用すると、非常に効果が高く害もないことは、これまでの経験で明らかであること。もし石灰の使用を廃止してしまえば、ほかに安くて良い肥料がないため、普通の農家は高価な肥料を購入できず生産力が落ちて経済上大きな影響を被ってしまうこと。そして、石灰の使用には「石灰肥料施用制限取締方法」を規定して確かに守るので、使用を検討して欲しいと訴えています。



石灰制限施用ニ付陳情書
（福崎町立神崎郡歴史民俗資料館蔵）

取締の内容として、石灰は一反につき一年に三十貫（約百十二キロ）以内とすることや、石灰を使用する地には堆肥などほかの有機肥料も使用すること、また、各部落毎に必ず肥料共同購入組合を設けて石灰の使用量を算出して共同購入することや、石灰使用制限取締規約を作り共同責任をもって取締を行うことなどが定められています。

このような農民の声もあってか、明治四十三年三月二十五日、県令第十七号を持って石灰使用の禁は解かれています。再び石灰の使用が認められたこの年には、『石灰施用組合規約』（田尻区）、『有機物・石灰施用台帳』（余田区）、『石灰施用申合規約』（高橋区）などの資料が地域に残っていますので、陳情書に記されたように取締規約を守りながら、石灰を肥料として再び使用するようになったのではないかと思われます。

石灰製造について

石灰の製造については、前述の聞き取り場所以外にも、西大貫区でも行われていたと伝わります。採掘された石灰石は区内に跡が二か所確認されている窯で加工され、市川から船で運び出されていたそうです。

また、令和四年五月に東大貫区の皆さんと実施した区有文書整理で確認された資料の中には、明治四十三年に八千種村の四名から提出された石灰製造に関する契約書がありました。これには、大貫村に隣接する加西郡富田村（現加西市）で石灰製造業を開始するにあたり、原石運搬のため東大貫の所有地の借地料や里道の修繕費などを定めたものです。おそらく亀坪区中池西側の灰山で採掘した原石を運び、製造がおこなわれたのでしょう。

おわりに

今回の調査で、福崎町域でも石灰石が採掘されていたことや肥料として重要だったこと、明治時代を中心に石灰製造が行われていたことを知ることができました。岩石の分布から調べたため、福崎町東部の報告が主となりましたが、地域に残る文書を探す中で、明治十年二月に西治村から兵庫県権令あてに提出された願書の控えを目にしました。

西治村では、字畑ケ田の耕地の用水として市川の千束から山崎村を通って水を引いています。この水路は、大雨が降ると山崎村の西北にある字杉谷山から砂礫が流出するので、毎年多くの人夫を費やして水路を浚ったり、砂止場を設けて砂礫を防止していました。そこにこの度「杉谷山ニテ肥シ灰石ヲ掘出度旨入会村連署ニテ已ニ出願相来リ候趣」があったのですが、石灰石の採掘を行うと砂礫もたくさん流出するので、後日水路に不便が出ないように入会の村々によく言い聞かせてほしいという内容です。

石灰石の掘出を願い出た山崎村字杉谷山がどこに当たるかの比定はできていませんが、神前山の西の谷である「直谷」ではないかと想像されます。実際に採掘されたかどうかはこの文書だけでは不明ですが、福崎町の東部だけでなく、ほかの場所でも石灰石が見つかっていたことがわかります。

そういえば地元の山で石灰石を採掘していた、窯があった、というお話を聞いたことがある方がおられましたら、ぜひ情報をお寄せください。福崎町の新たな一面が発見できるかもしれません。

最後になりましたが、区長様はじめ、石灰の調査に協力してくださった全ての方々に厚くお礼申し上げます。

第十回福崎町柳田國男ふるさと賞　中学生の部　受賞

福崎駅・駅周辺の歴史

福崎西中学校二年　原田　真優

一、はじめに

私が住む駅前区には福崎駅があり、最近では、福崎駅周辺整備事業により、駅周辺が、私の小さい頃とは大きく変わりました。また福崎駅も、今ではイベントが開かれるようになったり、観光交流センターができたりと、小さい頃とは大きく変わりました。新しくなった駅を見ると、「昔の福崎駅はどんなだったのだろう、駅周辺はどんな町並みだったのだろう」と気になりました。そこで、福崎駅、駅周辺の今と昔を比べ、昔はどんな町並みだったのかを調べることにしました。

○予想

車がまだ普及していない時代、当時の人たちの移動手段には楽で身近な汽車が用いられ、福崎駅はたくさんの人々でにぎわい、駅周辺はたくさんの人が住む住宅地だったのではないか。

二、調査の手順

福崎駅・福崎駅周辺を調べる。

①聞き取り調査

・私のおばあちゃんに聞く。

②文献調査

・図書館で調べる。

・町役場で調べる。

③現地調査

・駅や駅周辺に実際に行く。

○聞き取り調査（私のおばあちゃんに駅周辺のことについて）尋ねた。

・昔はよく、子ども（私のお母さん）をつれて、自転車で駅前商店街に行っていた。

・特にいづみや百貨店（今はもう無い）に行くのが多く、体操服や日用品、文房具などを買っていた。おもちゃや浮き輪も売っていた。

・肉屋さんや魚屋さん、八百屋さん、服屋さん、お好み焼き屋さんなどがあった。（商店街に）

・駅前商店街には、歩行者や自転車に乗った人が通ったりしており、人がたくさんいた。

・店の前では店員さんとお客さんが話していることがほとんどで、とてもにぎやかだった。

・さくら屋というケーキ屋さんが福崎駅の近くにあったため、和菓子やケーキ、贈りものなどをよく買っていた。

・駅前ニューセンター「なぐさ」というスーパーが駅周辺にあった。

○文献調査

町役場に駅などについての資料があるか探してみましたがありませんでした。福崎の図書館では資料を探すことができました。

○現地調査

現在の福崎駅、福崎駅周辺の様子はどうなのか、現地に行ってみました。行った場所：駅前商店街・福崎駅

三、調査結果

○福崎駅

①福崎駅の歴史

1893年7月……播但鉄道の工事開始

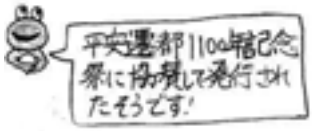
1894年7月25日……姫路から寺前間が開通する。福崎駅が建設される。

1895年4月……播但鉄道（姫路～生野）が全線開通する。

1903年6月……播但鉄道を買収する。（山陽鉄道）

1906年……国有化により、国有鉄道播但線となる。

播但鉄道乘車割引票(1895年)



1936年……駅舎改築

1959年……播但線無煙化要望

（1960年から機関車のディーゼル化が進む）

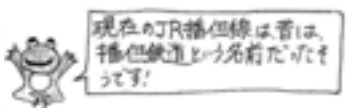
1972年……播但線無煙化（ディーゼル化）

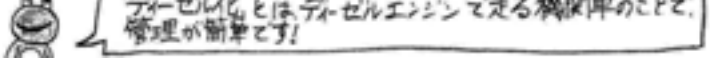
1973年4月1日……貨物の取扱を廃止する。

1987年……JR播但線となる。

1998年……姫路から寺前間が電化される。

2019年10月6日……福崎駅周辺整備事業が完了する。





②写真で見る福崎駅の歴史

大正時代

福崎駅プラットホームでの記念撮影(駅員と運送店従業員一同)

上り列車「8402型」蒸気機関車

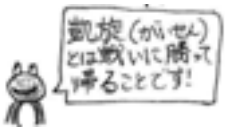
福崎駅正面

福崎駅よりの発車時刻表(姫路行き上り、和田山行き下りの発車時間と各駅への運賃が書かれてある。)

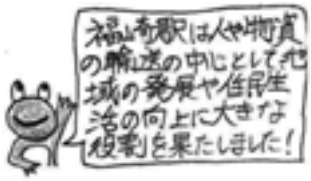
福崎駅プラットホーム

昭和時代

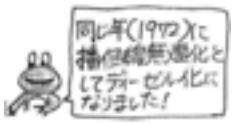
改築された福崎駅 (昭和11年)



福崎駅凱旋歓迎風景(昭和8年)



福崎駅改築記念撮影

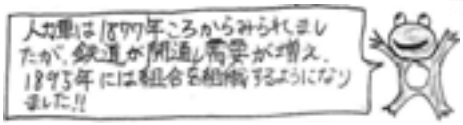


平成時代

電化記念(姫路～寺前間)出発式(平成10年)

山崎・千束付近を走る最後の蒸気機関車

無煙化の要求が高まり1960年から機関車のディーゼル化が進んだ。



令和時代

竣工式典の様子(令和元年10月6日)

③福崎駅の発展

福崎駅前の人力車(昭和初期)

播但鉄道が開通すると、福崎から北条（現加西市）間に乗合馬車が走るようになりました。同じ年に運送店が開業しました。1895年になると人力車が福崎駅に増え、最もいきおいのある時には車夫（人力車をひく人）が40人もいたそうです。（大正末期になると14人になりました。）

2022年 調査
(令和4年)

現在の福崎駅　駅前観光交流センター、アマビエのベンチなどがある。(現地調査時に撮った写真)

1922年になると、新しい乗り物として自動車などが登場し、フォードなどの外国車を使って、乗合自動車（バス）が福崎駅から北条間を走るようになりました。また、1923年には貸切自動車の営業も開始され、駅から一時間は4円、一日は35円、一里は1円80銭で営業していました。

福崎駅と加西郡北条町間を往復していた。(明治頃)

福崎駅前にあった運送業者(時期不詳)いずみや百貨店があった場所で営業されていた。鉄道貨物を取り扱っていた。

○松茸

神崎郡は松茸の産地としても有名でした。「伏見宮殿下（皇族の方々）のご來駕を賜った」という記録も残されています。大正14年の生産額は184トンの631万円で、福崎の松茸として阪神地方へ輸送し、遊客でにぎわっていました。また、大正時代は秋になると臨時松茸列車が増発され、阪神地方から茸狩り客で、福崎駅周辺は大変ににぎわいでした。私のおばあちゃんに駅周辺のことについて聞き取り調査すると、「駅前商店街にはよく行っていた。」と言っていたので調べてみました。

松茸狩り客でにぎわう福崎駅前(大正頃)

○駅前商店街

播但鉄道が敷設され福崎駅が建てられると、駅周辺を中心とする道路が発達しました。そこを中心に商工業者が移住し、商店やその他の建物がならび、現在の駅前商店街になりました。そこでは人口も増加し、駅前は発展して、明治末頃には百戸以上の大字を形成し、郡内の枢要な商業地になりました。

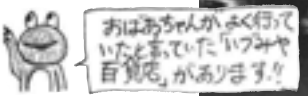
雪の駅前通り(1932年)

〈私の母が子どもの頃駅前商店街にあった主な店〉

- 福崎書房
- いづみや百貨店
- スーパーなぐさ
- 菓子さくら

形成された駅前通りの様子が伺われる(1921年頃)

昭和30年代の駅前通り



○駅周辺にあったいろんなお店や建物

播但鉄道が開通し、交通の便がよくなったことで、人通りが多くなった駅周辺には、昔、たくさんの店や建物がありました。

福崎駅から西の様子(大正末)　田園が広がっている場所もあった。

福崎劇場(1931年7月24日)　完成当日の写真

福崎駅前にできたスーパー

四、おわりに

普段何気なく通っている福崎駅や福崎駅周辺には、こんな歴史があるのかとおどろきました。特に福崎駅に昔、機関車が走っていたことにおどろきました。また、劇場やスーパーがあったことなど、その建物が今も残っていたら福崎駅周辺はどうなっていたのだろうと思いました。今回、「昔の様子」について調べましたが、昔の遊びも気になったので調べたいです。調査するとき、特に駅前商店街についての資料が少なく、探すのが大変でした。いつもはインターネットで調べがちですが、このような図書館の資料から自分で調べることは、とても大切だと思いました。調査に協力してくださった皆さん、ありがとうございました。

五、参考文献

・福崎名人まちあるき（魅力編）
　編集　福崎町総務課
　制作　株式会社ぎょうせい
　平成18年3月発行
・かたりべ　第十六集
　編集　福崎町かたりべ会
　平成９年11月１日発行
・福田村史
　編集人　福田村歴史研究会
　制作　株式会社風詠社
　２０２２年３月発行
・国土交通省国土地理院ＨＰ
　//maps.gsi.go.jp
・近畿運輸局
　//wwwtb.mlit.go.jp
・Ｇｏｏｇｌｅマップ
　//www.google.com/maps
・地域のお宝再発見
・わたしたちの郷土ふくさき
　昭和52年度版

第十回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学生低学年の部　受賞

福崎町の公園について

高岡小学校三年　尾崎琴

◆はじめに

福崎町の公園巡りをしていたら、福崎町で一番最初にできた公園はいつなのか知りたくてたまらなくなりました。だから調べました。でも「公園」ができる前、子どもたちはどこでなにをしていたのでしょう。それも知りたくなりました。わたしはこの二つを調べることにしました。

◆今ある公園

①福崎町スポーツ公園（百才の森）

ここにはせみが多いし、せみのしがいもたくさんおちていてふみそうになります。でも、ローラーすべり台は楽しいです。下から上へのぼっていったりして楽しいです。

②駅前じどう公園

ここは草がはえていてお店やさんごっこができます。おわったあと手が茶いろくなっていたら水道があるのでべんりです。

③市川河川公園

ここは川があります。芝生があるからこけてもいたくないし、バスケットゴールもあるからバスケットができます。ピクニックもできます。ゆうぐも少しあります。ここは水場があるから、わたしは石をジャンプして遊びました。

◆むらの方にインタビュー

おじさん

Q．小さいころ「公園」はありましたか？

A．なかった

Q．小さいころどこでなにをして遊んでいましたか？

A．冬はターザンごっこや自分で作った木刀でチャンバラごっこやかくれが作り、きんま（そり）を作ってすべる。公民館やじんじゃのけいだいで遊ぶ。夏は川遊び（上流から下流まで一日かけて遊ぶ）水泳や魚つり、石づみ、人数はたくさん（一～六年生みんなで遊ぶ）遊ぶ物はみんなで作っていた。

おばさん　奈良県出身（七十二才）

Q．小さいころ「公園」はありましたか？

A．あった（ぶらんこやすな場だけ）

Q．小さいころどこでなにをして遊んでいましたか？

A．冬はマラソン、へやでカルタや小さい子のめんどう見。夏は川でするめを使ってザリガニつり、魚つりもできた。おじさんと同じく山で遊ぶこともある。春から秋までできせつの遊び。はらっぱで運動会の練習。ねんれいはさまざま。リーダーがいる。↑（おばさん）

◆役場へインタビュー

Q．福崎ではじめてできた公園はどこですか。また、いつですか？

A．駅前児童公園。（昭和五十三年前後かもしれない）ふれあい広場なら、さくらふれあい広場。駅前児童公園とさくらふれあい広場なら、さくらふれあい広場の方がとても古い。

Q．福崎町スポーツ公園はいつできましたか？

A．かんせいは平成八年

Q．市川河川公園はいつできましたか？

A．平成十二年

◆まとめ

わたしは昔の遊びをしらなかったけど、この自由研究をして、きんま（そり）や魚つり、ほかにもいろいろとしらない遊びがたくさんありました。できそうなこともあれば、できないこともありました。

インタビューしたおじさんの子ども時代の福崎町は、公園が一つもないことがわかりました。わたしは、家の周りに虫や川などの自ぜんがあるから、おじさんやおばさんと少しは同じことができます。でも、自ぜんのない町の子たちは、公園がないと外で遊びにくいと思います。だから、安全な公園はたくさんひつようだとわかりました。さいごに、福崎町にはたくさんの公園があるけど、もう一つだけ公園がほしいです。赤ちゃんや高れいしゃ、車いすの人たちが遊べる「みんなのための安全公園」を考えて絵にかきました。さんこうにして作ってください。

第十回福崎町柳田國男ふるさと賞　小学生高学年の部　受賞

土かべとしっくいの考察

田原小学校五年　井藤千都

1　動機（きっかけ）

わたしの家は土かべで作られています。3年前、家をたてる時に土かべをぬる体験をしたり、左官やさんがかべにしっくいをぬっている所を見たりしました。お父さんや左官やさんがぬっているのを見るとかんたんそうに見えたけど自分がやってみると、土は重たいし、じょうずにかべにひっつかないし、ぬるのは、とってもむずかしかったのをよくおぼえています。五年生になって、社会であたたかい地方のくらしを勉強した時に、屋根やかべにしっくいが使われていることを知りました。そこには生活の知恵がつまっていました。おじいちゃんの家にもしっくいや土が使われていたり、古い町を歩くと土かべの景色を見たりします。そこで、土かべやしっくいのひみつを調べ、昔の人の知恵や工夫にせまってみようと思いました。

お父さんと自宅の壁を塗っている私　当時7才

2　土かべやしっくいの歴史

しっくいの歴史はとても古く起源は今から5千年前のエジプトのピラミッドといわれています。ピラミッドのほかにも古代ギリシャやローマ時代の遺跡からも砂をまぜた石灰モルタルの形で使われていたことが分かっています。まだ生がわきのしっくいのの上に絵を描く「フレスコ画」としても使われてきました。ほかにもしっくいを使った古い建物が残っています。

5000年前のピラミッド

日本におけるしっくいの歴史は、1300年前、奈良、平安時代といわれており、セメントがない時代に高級な物として、きめられた建物に

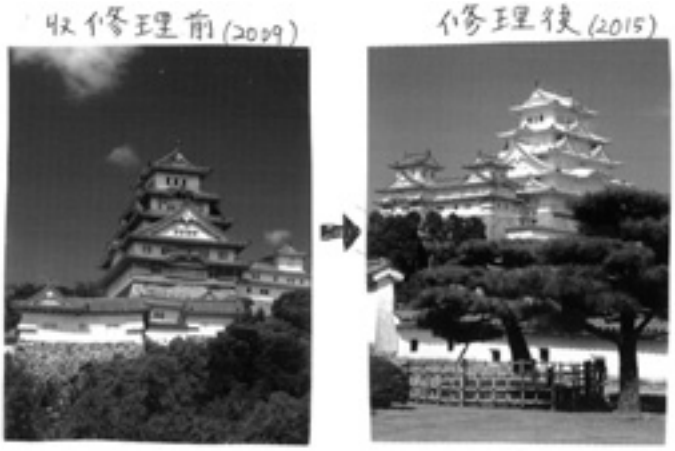
使われていました。一般的な社寺が多かったです。多くの一般の家は木で作られていましたが、江戸時代に入り江戸や地方で火事がおこり、住たくどうしがよく近づいているので火事が大火事になっていたそうです。そこで、もえにくく、手がるに手に入る「土」を使った土かべが広がったといわれています。そして、さらに防火作用があるとされているしっくいは、大切な物をしまう蔵にぬるようになったといわれています。現在はかんたんに使える建材がたくさん出てきて、土かべやしっくいを使った建物がへってきています。

私たちの住む兵庫の姫路城は世界遺産として有名ですが姫路城にもしっくいが使われており、その白い姿は白鷺城（しらさぎじょう）とよばれています。

姫路城は、２００９年から５年半かけて修理を行いました。この修理でしっくいをぬり直しました。しっくいのあつさは３cmもあるそうです。あまりに白すぎると話題になっていましたが、現在ではわたしが見なれたか、色がおちついたのか分からないけれど、わたしは白すぎるとは思いません。

３　三木家の保存工事からかべやしっくいを見てみよう！

三木家は、保存工事をするに当たって、どの時代ぐらいまでの建物に復元するかなやんだそうです。なやんだ結果、江戸時代から大正時代ぐらいまでの様子を復元することになりました。どこまでなおすかは、むずかしいと思いました。



★ 大庄屋 三木家住宅

兵庫県指定重要有形文化財

民俗学の父・柳田國男生誕の地 兵庫県福崎町

Village Representative Miki Residence
Cultural property designated by Hyogo

大庄屋三木家の仕事
～どうしてこんな大きな家なのか？？～

たくさんの庄屋をまとめていたからとってもみかんの高い人だったのかなと思いました。お金もたくさんあったと思うのでたくさんの人をやとっていたから大きな家になっていたのかなと思いました。大きいくらもたくさんあったんじゃないのかなと思いました。

三 姫路藩大庄屋として

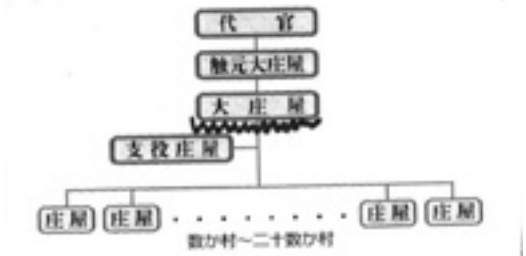
■大庄屋三木家の職務（仕事）

江戸時代、福崎町域の村々はすべて姫路藩領でした。領主は村々を代官、大庄屋などを通じて支配していました。姫路藩では、数か村から二十数か村ごとに大庄屋組が設けられ、庄屋の上に大庄屋が置かれました。

大庄屋の職務は多岐にわたり、職務上多くの書類を作成、入手していました。三木家に伝わる『諸御用日記』は、6代通明が書いた職務日記です。当時、辻川組は21か村からなり、日記には、これらの村々を統括する大庄屋の日々の職務にかかわる多様な記事がみられます。

【『諸御用日記』にみる大庄屋の主な職務】

- ○藩からの触れを村々へ伝達
- ○庄屋から藩宛の願書や諸届の取り次ぎ
- ○組内の年貢米の徴収や諸役の村々への割り当て
- ○水利普請などで資材・人材の調達、監督
- ○村々の取り締まり
- ○争論・訴訟の調停



「諸御用日記」からみえる支配組織図

三 三木家の建物

三木家の屋敷地は現在1861.18㎡（約563坪）で、敷地内には主屋（表座敷）、副屋、離れ、内蔵、米蔵、酒蔵（酒造蔵）、角蔵、厩、表門が現存し、周囲は土塀で囲まれています。これら9棟の建物すべてが、昭和47年に兵庫県重要有形文化財に指定されました。

主屋の建築年代は明らかでありませんでしたが、平成22年度から実施した保存修理工事に伴う文化財調査で、2階壁板から墨書が発見され、宝永2年（1705）に建てられたことが判明しました。母屋は表4間、裏4間の8室に分かれ、一部に2階を設けます。建築当初は表西側の2室はなく、元文2年（1737）に増築されました。

副屋・離れは宝永2年（1773）の増築で、離れは主屋の前まわりに数寄屋風の意匠を取り入れています。

三木家住宅は建築当時の姿をよく残した大庄屋遺構として、建築学的に貴重であると同時に、近代においては、民俗学者・柳田國男、生野銀山宿所車道（銀の馬車道）との関わりも深く、地域を代表する文化遺産です。現在、主屋部分の保存修理工事が終わり、部分公開しています。

宝永二年建築当時の姿を残す三木氏自慢の座敷

生態の建築年代を示す墨書（赤外線撮影）

❶主屋（表座敷）
建築年代：宝永2年（1705）
構造及び形式：桁行11間、梁間4間、つし2階建（角屋平屋）、入母屋造、本瓦葺、付　玄関脇別棟湯殿便所、西別棟湯殿便所、内蔵南湯殿

❷副屋
建築年代：安永2年（1773）
構造及び形式：桁行5間、梁間2.5間、2階建、南切妻、本瓦葺

❸離れ
建築年代：安永2年（1773）
構造及び形式：桁行4間、梁間4.5間、2階建、入母屋造、本瓦葺

❹内蔵
建築年代：元禄10年（1697）
構造及び形式：土蔵造、2階建、切妻造、本瓦葺

❺米蔵
建築年代：明治前期
構造及び形式：土蔵造、2階建、切妻造、本瓦葺

❻酒蔵（酒造蔵）
建築年代：正徳3年（1713）
構造及び形式：土蔵造、2階建、切妻造、本瓦葺、付　炭中部屋

❼角蔵
建築年代：江戸後期
構造及び形式：土蔵造、2階建（一部平屋）、切妻造、本瓦葺

❽厩【解体中】
建築年代：江戸後期
構造及び形式：2階建、南入母屋、北切妻造、本瓦葺

❾表門
建築年代：明治7年（1874）
構造及び形式：切妻造、本瓦葺、付屋

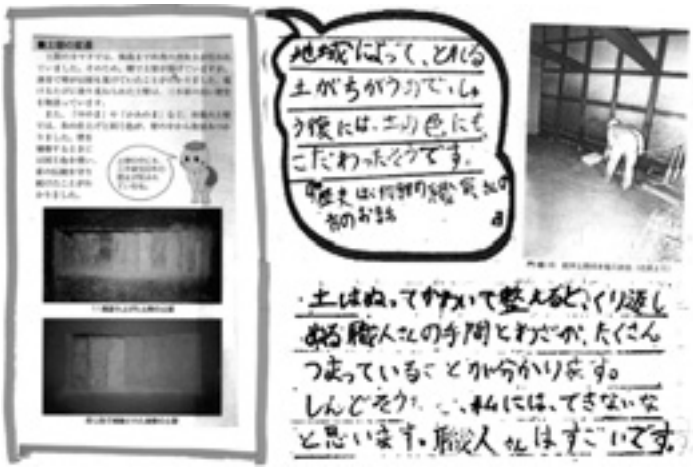
保存修理工事前の三木家住宅

建物配置図

土やしっくいで作られてます

主屋部分の1階を公開

たくさんだ!!



4　お父さんはどうして手間のかかる土かべやしっくいにの家にしたの？
―お父さんにインタビューして分かったこと―

お父さんは、「自然と体にやさしい家にしたい。仮に家をつぶしてしまっても極力自然にかえる家づくりにしたい」と思って、土かべやしっくいにこだわったそうです。土かべの下には竹小舞という方法（三木家に使われているやり方）も考えましたが、木ずりという方法でしました。木も自然にかえるからです。

かべになる土は、地元の土にわらと水をまぜて発酵させ使います。昔からの方法で発酵させると粘りが出て、ひびわれにくく、強さが出てきます。また、土かべ自体がこきゅうをするので、空気環境を整えます。さらに、あたたまった地面がさめにくいのと同じで保温に役立ちます。そして、土も自然にかえります。

しっくいは、アルカリ性できんをよせつけないので、カビを防ぎます。しっくいはそれだけではかべにつかないので、海そうをたいて、のりを作り、まぜて使います。これも１００％自然にかえります。私は住んでいて、あったかくてすずしいのでおすすめです。でも住むまでに時間がかかりました。

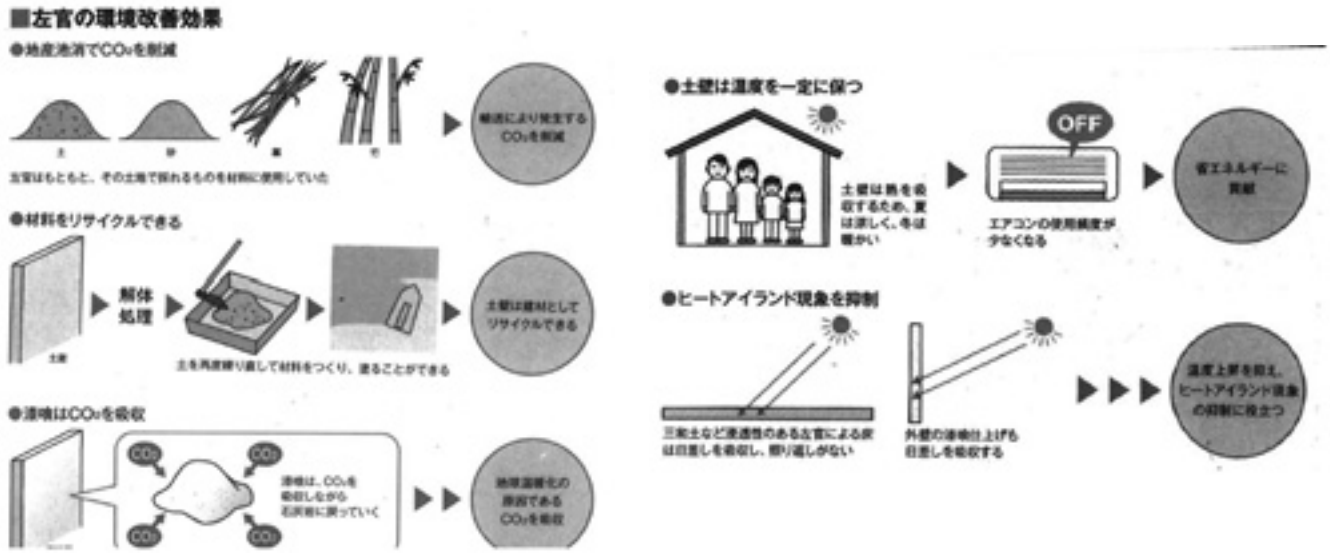
5　おじいちゃんにも聞いてみた、家づくりのリユース

お父さんの言っている「使ったものすべてが自然にかえる」は、リユースにつながると思います。つぶしたら、土にもどるのでもう一度、かべに使うことができるからです。おじいちゃんに聞いたら、おじいちゃんが中学生のころに、家をつぶして建て直したそうです。つぶした家の土を持ってきた新しい土とまぜて、今の家の南側のかべにぬったそうです。昔の人は、生活の中であたりまえのように、エコロジーなことをしていてすごいなと思いました。

このように、昔の人は生活の中からいろんなことを見つけて生活に活かすことをしていました。身の回りの物を使って、活かしていてすごいなと、えらいなと思いました。

土かべのよさ 5つの特ちょう

①健康によい	自然の素材だけでできており、人の体の害のある物をふくんでいない。
②しっ気を調節する	呼吸をするようにしっ気を吸ったりはいたりして室内のしっ度を調節。 ・カビやダニの発生防ぐ。
③火災に強い	・燃えにくいので、万一、火災になったときにも、燃え広がる時間をかせぐことができる。
④気温を快適に保つ	夏は外からの暑い日ざしを防ぎ、冬は室内の暖かい空気を保つ。
⑤ゴミにならない	・こわしても、自然にかえる素材なので、地球環境に優しい。



○自宅の土かべ作りを見直してみよう!!

①土とわらをまぜる

※まぜあわせた土はちゃ色くて、ねっちょりしていました。

②たねと土を混ぜて発酵をすすめる

④かべの下地(木ずり)を作ります

③いよいよ材料のかんせいだ!!!

※さらに発酵がすすむと、ふわふわと表面に泡があがってきます。わらがとけたように柔らかくねっちりかぶ…ヒリになります。においは、土のにおいの中にわらのいおいがまじり、くさいけれどもいいにおいになりました。

使いやすいようにおけにとりだします。

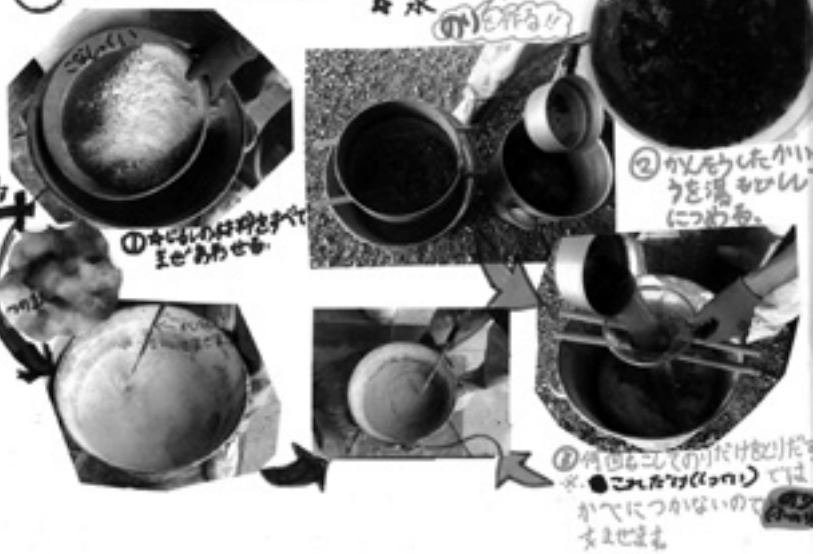
※発酵がすすむと土の色がくすんだ色へと変わります

⑤下地の土かべをぬっていきます

○しっくい作り

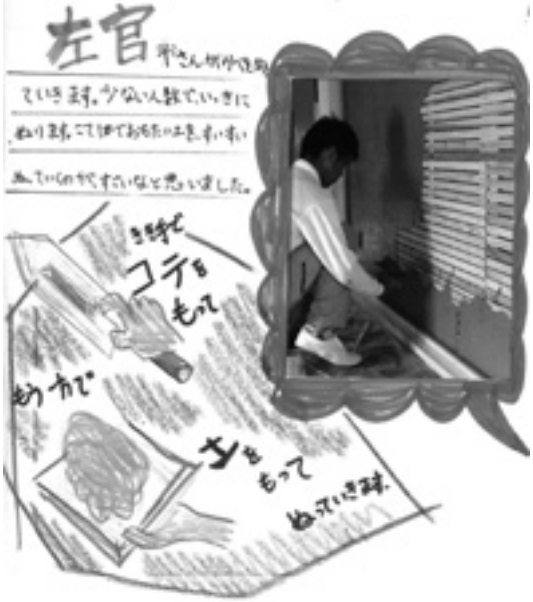
材料
☆白雪(しっくいのみ)
☆つのまた
☆水
☆かいそう

のりを作る



左官

平さんがかべをぬっています。少ないん数でいきにぬり方にてはげてあるたの土をかいまいあっていのがすごいなと思いました。

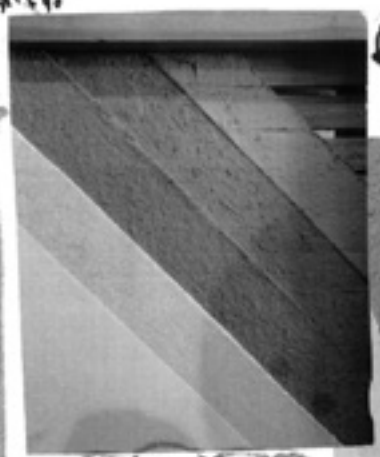


MIX

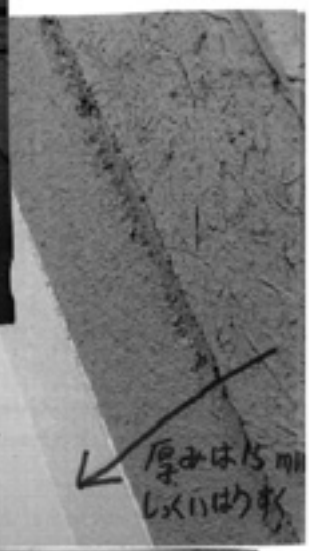
どんつけてぬかせてつかうとしっとりぬりやすいです。

※一気にぬっていきます。目と手で平たくぬっていくしょくにんさんにびっくりしたことを覚えています。

一枚のかべを何そうにも分けてぬるのはすこしずつぬることでわれをふせいでいるとお父さんからきき書きました。



お父さんがつくった土かべの木表面もけい



最初の土かべはぶあつめにぬり、どんどんかわいてからぬり重ねていきます。重ねるたびにうすくぬり重ねます。しっくいと土をまぜたものをぬり最後にしっくいのみをぬります。だいたい15㎜の厚さになれてます。

厚みは15㎜しっくいはうすく

何層にもかさねられて、さいごにまっ白なしっくいをぬって仕上げていきます。さわるとひんやりしています。人の手でぬっているのに、でこぼこしていなくて、平らで美しいです。私がしたら、でこぼこになってしまいそうです。海そうが、のりになることに、びっくりしました。100%自然のめぐみで作られているんだなと思いました。

○しっくいの効果について調べてみよう!!

実験 5種類のかべを作成し昨年で行った実験を発展させました。5種類のかべの上に防腐剤の入っていないパンとパンを置いて、どんなようす・個性をつくります。どこにカビが生えるかの楽しみです。

実験1
Ⓐ石こうボード＋クロス　Ⓑ新しい土
Ⓒ新しい土＋しっくい　Ⓓ発酵土
Ⓔ発酵土＋しっくい

今回はかべ作りですが作ってきたものもいろいろ。しっくいの時間のため使いました。

水酸化カルシウムとは、消石灰ともいう。強いアルカリ性もしめす。細菌や、液体の消毒剤で二酸化炭素をきめしゅうしゅうする。強いアルカリ性の水酸化カルシウムに変わる。強いアルカリだけなので、酸性のほうは中和のしょうせいの中和剤、清掃剤などに使われている。

(Yahoo コトバンクより)

白いけがわるかったからかべ作りをしたそのかべ。

水としっくいを混ぜてねり練。かくはんきを使ってねります。ワイワイとねりながら、ぬりてをしたりしました。

混ぜるとねっとりしていますが、かくはんにはつんつんしたのがついています。きれいなかべをちゃのこすったりしました。アーム鍋を使って入れ物作りでした。

ゲッパクの工作ですね。

使用するしっくい

色つけをまわりたたき　発酵土がでそうでました

今回の防腐剤に自宅で使用した時の発酵土より発酵が進んでいましたのお父さんの気づかい、強くなりました。

今回ぬりかべ色を変えました。強度は強くなるので、とっくりしました。

石こうボードは同じ材料をつかったのに色が全くちがっていてびっくりしました。新しい土は内の色のちがいがしていましたが、ヘドロのにおいがしました。

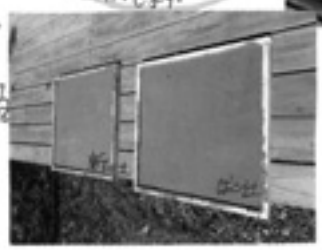
いよいよ土がべづくり

ブラシをつかってぬっていきましたが、思うようにできず、はけ、ブラシなどいろいろ使いました。

同じあつさにならないし、どんどんもりもりにしてしまう。

最後は丸いに気をつけながらならしていきます。ぬりおわったらしっかりかわかします。

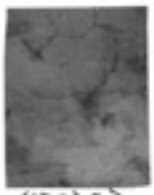
二種類の土をぬりましたが、ぬる時のかんじでぜんぜんちがいました。見た目にもわらもなくなりしっとりしていたのは、発酵土の方でした。ぬりやすさがぜんぜんちがいました。昔の人の知えがあります。



・かわいてきたら、かびがついてきました。
・まわりは白くなったので、コップをとりました。
・ほんとうは、外ぶたにも、ラップをかけてかぶせたけど、今日は、いっぱいにかわかしたのでかけてきました。
（あかしさんからきいた。）
・よみべがかわくのにはもっともっと時間がかかるし、ていねいにやらなきゃいけないことがわかりました。

※Ⓑ Ⓒ Ⓓ Ⓔ とは分わけやすくするためでした。

土エ
むずかしい
大きい、むずかしい
いろがぬりにくい!!
ケーキのイメージで
ぬってたけど、
うまくいかないこと



厚みをみただけでちがうのとかってしまうんだ。これじゃあ、お客さまをおこらせてしまうとはあーとしみじみ思った。

土をけずってしまったことでさしてしまった土がまざってしまった所を作ってしまったのはきれいにぬるのは本にむずかしい!!

かわいてもいろのちがいははっきり分かる上手

<くれいエ>
細かい、ひびしかれていないけれど、全体にくっきんがはいっていた。
強いかぜがあると、ペロペロとなってくるくるとなってしまうかんじがでました。

<はっこうエ>
かびはほとんどかからずにはっこうしてペロペロとなる感じくるくるかんじがでました。

ゆ様とおんなじかんじあるとおもいとかいてしまった。はっこうがすごい!!

天日ぼしにしまし、本当は1週間2週間かけてかわかすらしいのですが今日だけ6時間でした。

お父さんが言うにはわらもみたのはわれとめくじですがはこうすることでよりせいかがうすけつきやすくなりわれにくい。これしくい強度が強いようなちえも入っているんなる表面をみてわかったようなきがしました。（表面）

①

②

①ホローよりきれいなペーパー
②ホローエりきれしっくいを入れかわかしました。その上にキッチンペーパーをしきました。

パンがくずりにくいか見ました。

パンは市販の入っていない無添加の物を使いました。

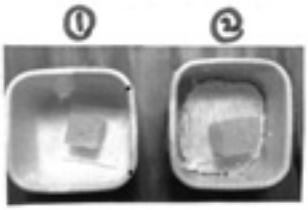
パンの大きさはなるべくおなじにしました。

実験2

①

②

8/18
①・②それぞれにパンをおきます

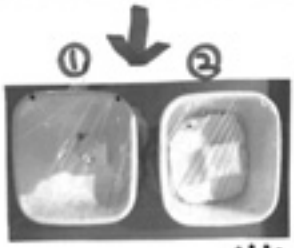


①

②

8/18
ラップをそれぞれしてみました

8/19 変化なし



①

②

8/20

しっくいなし①	しっくい入り②
まわりがかびの発生	変化なし

おおっ!!

実験2からわかったこと

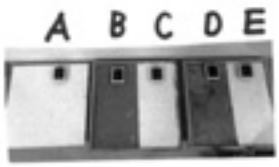
・しっくいはさわると、冷めたくて、体によさそうに感じました。しっくいはいいと、いろいろ調べたけど、どういいのか分かりにくかったけど、実験をしてみて、本当にカビをよせつけない効果があるということが、分かりました。
・だから、くら作りに使われるのは、なっとくしました。

かわいた土かべを使って いよいよスタート!!!

〈実験1〉

ボードにおく前の温湿度になります。できるだけじめんをそろえて、スタートしました。ボードをおく場所も同じにしました。

温湿度計を5つ準備しました。



スタート前(ボードの上)

	A	B	C	D	E
室温	26.5℃	26℃	26.5℃	26.1℃	27.4℃
湿度	72%	67%	67%	66%	63%

	A	B	C	D	E
室温	26.5℃	26.4℃	26.6℃	26.5℃	27.4℃
湿度	70%	71%	71%	69%	65%

スタート前(ボードの上)

	A	B	C	D	E
室温	26.3℃	26.3℃	26.1℃	26.0℃	25.9℃
湿度	62%	80%	96%	93%	99%

8/18 スタート時

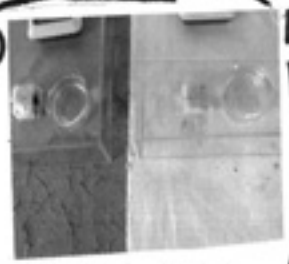
	A	B	C	D	E
室温	27.8℃	28.1℃	28.6℃	27.5℃	27.4℃
湿度	77%	80%	91%	94%	99%
変化	カビ(大)	カビ(中)	カビ(小)		

8/26 開始からの日数

8/9 …変化なし

8/21 8/20〜25 不在でカビの観察をおうこと出来ませんでした。

アップ写真



実験をしてみて…

…発酵土についてたくさん聞いたけれど、発酵といえば、なっ豆やヨーグルト、みそなどのように、体にはいいけれどくさらせるイメージもあったので、私の最初の予想では新しい土がしっくいが、一番カビがはえにくいと思っていました。たけど、結果は、発酵土がしっくいが、一番カビがはえませんでした。湿度が高いのに、カビがはえにくいのは発酵土がすってくれるからということが分かりました。

6　福崎町のかべの変化

(1) 調査方法

外側にしっくいが使われている家を調べました。車で各村をまわり、使われている家をカウントしていきました。外側から通っているだけで正しく見れていないかも知れません。また、通れていない所があるのでできるはんいでやってみました。結果は、次の表のとおりです。

村	世帯数	しっくいであろう家の数	村	世帯数	しっくいであろう家の数
長目	112	26　約23%	井ノ口	105	16　約15%
中島	239	17　約５%	北野	102	17　約16%
上中島	82		辻川	502	17　約３%
西光寺	417	20　約４%	田尻	489	12　約２%
八反田	114	8　約７%	大門	345	69　約20%
吉田	158	21　約13%	かじたに	74	12　約16%
西野	170(21)	7　約４%	かめつぼ	13	5　約38%

(2) 調査から分かること・考えたこと

・田原校区に住んでいる人の家は、しっくいの家が少ない事が分かりました。昔の田原校区の写真を見ると、しっくいの家などは、とっても多いけど、今では、しっくいの家も少なくなっています。

・世帯数の多い①辻川②田尻③西光寺は、世帯数が多いわりにしっくいであろう家の数が少ないことが分かります。世帯数にしめるしっくいの家の割合を調べました。割合が２けたの村は長目、吉田、井ノ口、北野、大門、かじたに、かめつぼでした。割合が多い村は、わりと昔の風景が残っていると考えられます。逆に割合が少ない村は、新しい町なみであると考えられます。だから田尻は新しい家が多く、今の福崎町の姿をあらわしていると考えられます。しっくいの家がへったのは、たくさんの家を建てる材料が出てきたことが理由と考えます。時代に合わせて、景色はへんかしていくものだなと思いました。

(3) まとめ・調べて思ったこと

・昔の人は、身近な物から素材を見つけて工夫して使ってすごいなと思いました。自分たちの生活をよりかいてきにするためには何をどうしたらいいのかを考えて作っていくことにびっくりさせられました。

・職人さんは、すぐに職人さんにはなれません。どんな仕事でも、そうだと思うけど、コツコツ考えて仕事をつみ上げていくことで本物になっていくんだと思います。そのコツコツした「わざ」の上に家や景色はどんどん作られていくんだと思いました。

・自然でリユースしている昔の人のしせいを見習いたいです。

・私のお父さんは、自然にかえる家を目ざして、仕事をしていると知りました。自分たちのことだけじゃなくて、地球のことも考えているので見直しました。

7　最後に

私は土かべとしっくいの家に住んでいて、あたたかいし、すずしいし、きもちいいです。へってきている土かべやしっくいかべですが、私は、あらためて、そのよさをみなさんに、ぜひすすめてみたいと思いました。古いものも、いいものです。人の手で作り出すことはすてきだと思います。

柳田國男ふるさと賞

福崎町が生誕の柳田國男先生は生前、「日本人とは何か」という問いの答えを求め、日本列島各地に赴き、その地の民間伝承等を調査、研究され、日本民俗学の確立に貢献されました。

その先生の功績を称え、町では小中学生に、より深く民俗学を学んでもらおうと平成25年度から「福崎町柳田國男ふるさと賞」を創設しました。

このふるさと賞は、夏期休暇などを利用し、自ら、郷土の歴史やそこに伝わる伝説・習俗などを調査、研究しまとめられた作品の中から優れたものに贈られます。

今回は10回目を迎えることとなりましたが、今までの作品をみますと、今、調べて残しておかないといずれ忘れられてしまうだろうと思われる貴重な作品がたくさんあるのに驚かされます。

第２の柳田國男が誕生することを願い、郷土に愛着と誇りを持てる子どもに育ってほしいと創設した賞ですが、その副産物として、多くの作品が町の貴重な資料になっています。

このふるさと賞に参加いただいた皆さんに感謝を申し上げるとともに、引き続き柳田國男ふるさと賞への応募をお待ちしております。

公民館クラブ会員募集

町には住民の教養の向上、健康の増進、生活文化の振興、社会福祉の増進を目的とした社会教育法に基づく公民館が2つあります。一つは中央公民館として文化センターがあり、もう一つは分館として八千種研修センターがあります。この両施設や地域の公民館などでは趣味や教養に自主的に取り組む多くの団体が活動されています。

現在、コーラス、吹奏楽、書道、ちぎり絵、パッチワーク、パソコン、短歌、俳句、英会話、中国語教室、将棋、囲碁など、多数のクラブが活動され、定期的に公民館などで発表されています。

ふるさと文化祭での発表会の様子

各クラブは、それぞれで会員を募集しています。知識・技術を習得したい、その成果を地域へ還元したい、活動を通じて友人を増やしたい、等と思われる方は是非、挑戦してください。

また、新たにクラブを作って活動したい方も要件さえ満たせば、文化センターなどの施設を有利な条件で利用できます。是非お問い合わせください。

問い合わせ先　公民館クラブ事務局（文化センター内）22－3755

第四十一回 福崎町美術展作品募集

第四十一回福崎町美術展(公募展)の作品を募集します。

皆様方のご応募を心よりお待ちしています。

会期　令和五年六月九日(金)～六月十一日(日)

会場　福崎町エルデホール

主催　福崎町・福崎町教育委員会

部門　日本画・洋画・書・写真・彫塑工芸

応募は一部門一人一点、未発表の作品に限る。

作品搬入　令和五年六月三日(土)　午前九時～午後四時

審査員
日本画　島田　直季
洋画　井上　よう子
書　立山　艸雪
写真　しみず　いさを
彫塑・工芸　石井　宏志

山桃忌奉賛 第三十八回短歌祭作品募集

柳田國男先生と井上通泰先生の命日にちなみ、両先生を偲ぶ会として、毎年八月に柳田國男・松岡家記念館により山桃忌が行われています。

短歌祭は文化協会と福崎短歌会により、山桃忌の当日に行っています。

本年の短歌祭は、左記の要領で作品を募集します。

日時　令和五年八月五日(土)

場所　福崎町文化センター

主催　福崎町文化協会・福崎短歌会

作品　未発表のもの・一人二首以内

応募料　一首につき五百円

要領　原稿用紙に楷書で縦書き

宛先　福崎町文化センター内　文化協会事務局　宛

締切　令和五年六月三十日(金)

賞　通泰賞・町長賞・議長賞　教育委員会賞・文化協会長賞・商工会長賞・ＪＡ兵庫西賞・神戸新聞社賞の各賞と佳作多数

選者　楠田立身先生（兵庫県歌人クラブ顧問）

＊表紙の写真＊

表紙の絵は、福崎町立柳田國男・松岡家記念館に所蔵されている松岡映丘作《物語絵》です。右下に「明治二十七年十四才甲午冬輝夫画」とあり、映丘が橋本雅邦に追事するよりも早い時期の作品であることが分かります。

着物の柄や、唐破風屋根の描写の細かさからは、後年の作風の萌芽を見ることができます。

編集後記

たくさんの方々のご協力により福崎町文化第三十九号を発刊することができました。寄稿いただいた皆様、校正等にご協力をいただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

柳田國男ふるさと賞はホームページからもご覧いただけます。